① そのあくる日も、ごんは、くりを持って、兵十の家へ出かけました。

語彙的・文法的意味・構造

・その＝（代）〔第三人称、中称。関係を表す。連体詞的代名詞〕①聞き手にちかい関係にあることがらを表す。「この」よりは遠く、「あの」よりは近いことがらを示すのに用いる。「ー本を取ってください」　②すぐ前に述べた事物を指し示すことば。「彼は釣りに行って、ー帰りにわたしの家へ寄った。」

・も＝（助）〔限定を表す助詞〕①事情の似ているものごとを同じ種類のものとしてならべ示す。「子どもー年寄りーはたらく」　後略

指導の要領・留意点

・お念仏の帰りの兵十と加助の会話を聞いて、「おれは、ひきあわないなあ」と思うごん。しかし、翌日は、やはりくりを持って、兵十の家へ出かけずにはおれないのだ。並べの「も」を使うことによって、ごんの気持ちが強調されている。

・その時のごんの気持ちを考えさせる。
今は、神様の仕業になっているが、いつかは、きっとわかってくれる。わかってほしいというごんの願いを読みとらせなければならない。

＊わかってもらいたいと思っているのだろうか？

② 兵十は、物置で、なわをなっていました。

・なわ＝わら、麻などを細長く寄り合わせて作り、ものを縛るのに用いるもの。「ーをなう」「ーでしばる」

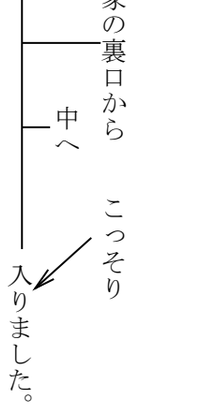
・物置＝薪炭やその他雑な物を入れておく小屋。または、部屋。

・縄は、実物を見せるのがよい。教師が師範すれば、なおよいだろう。わらも縄も、知らない児童が多い。

・町の家の物置とは違って、たいてい、別棟になっている。農機具をしまったり、農作業をしたりする。

③ それで、ごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。

・それで＝（接続）①前のことをうけて、「だから」「そこで」という意味を表す。「金がなかった。ーしかたなく野宿した」



・家の造りはわからないが、ごんと兵十の位置関係をとらえておかなければならない。

・三の文21「そっと物置の方へ回って、その入り口に、くりを置いて帰りました。」を思い出させる。
兵十が家の中にいるときは、物置の入り口にくりを置いて帰ったのだが、物置の中に兵十の姿を見たごんは、見つからないように用心して、家の裏口に回り、こっそりと中へ入っているのだ。細心の注意をはらう用心深いごんの姿が読みとれる。

④ そのとき、兵十は、ふと顔をあげました。　⑤ と、きつねが、うちの中へ入ったではありませんか。

・ふと＝（副）　①急に、たちまち「姿がー見えなくなった」
②思いがけず、偶然「ー思い出した」

・と＝すると（接続）のつづまったかたち。するとより、時間的に短い。

・か＝（助）　1，〔限定を表す助詞〕　2，〔感動を表す助詞〕驚きや感嘆の気持ちをあらわす。「りっぱにできるではないー」「そうだったのー」

・ふとは、用例で教える。

・兵十は、いつ顔をあげたのだろう。

・ごんが兵十の家の裏口から、こっそりと中へ入ったちょうどその時、兵十は偶然に顔をあげた。

・比較させる
すると、きつねがうちの中へ入りました。
と、きつねが、うちの中へ入りました。
と、きつねが、うちの中へ入ったではありませんか。

・一人でなわをなっていた兵十が、ふと、顔をあげると、きつね

が家の中に入っていった。それを見たときの兵十の驚き、あっと思った瞬間が強調されている。

⑥ こないだうなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしにきたな。

・こないだ＝「このあいだ」の略。現在よりも少し前。先日、先頃。「ーから、どうも身体の調子が悪い」「ーの土曜日、液で彼にあった」
・やがる＝〔接尾・動〕動詞の連用形につけて、軽蔑や憎しみを表す。「何をしー」「寝てばかりいー」
・め＝〔接尾・体〕①罵って言うときにつける語。「馬鹿者ー」②卑下して言うときにつかう語〔古風な言い方〕「この私ーをお許しください」

・兵十の心の動き、つぶやきの文である。「と思いました」が略されている。思ったことに「　」をつけさせる。
・こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、また、いたずらをしにきたな。
　　を引いた単語に注意して、兵十のごんに対する評価、認識の程度を読みとらせる。
・「こないだ」について考えさせる。
兵十にとっては、文字通り、こないだであり、うなぎをごんにぬすまれてからは、ごんは、憎しみの対象でしかなかった。しかし、ごんの方は、うなぎを盗んだころとは、すっかり変わっている。兵十にいわしを持っていき、いつも、心を兵十に寄りそわせているごんなのだ。
・兵十の憎しみ、驚き、怒りの強さは、ごんの一人芝居の切なさを際だたせて、一気に破局へと導いている。

⑦「ようし。」
⑧ 兵十は立ちあがって、なやにかけてある火ひなわじゅうを取って、火薬をつめました。

・なや＝納屋（体）物を納めておく小屋。屋外に建てた物置。「農具をーから出す」
・火なわじゅう…（火縄（体）竹・桧肌の繊維までや木綿糸を縄にない、これに硝石を吸収させた物。火をつけておき、鳥銃、または煙草の火などをつけるのに用いる物）火縄で火を導火線につけ、弾丸を発射するしくみの旧式の鉄砲。
・火薬＝（体）急激な化学変化で爆発を起こす物質。「ーが爆発する」

・兵十の行動を順におさえていく
　①「ようし」…決意
　②立ち上がって
　③取って　　行動
　④つめました…撃つ準備
・文⑥から⑦⑧と、緊迫感をはらんでたたみかける文。兵十の行動には、少しのためらいもない。
・兵十がなわをなっていたのは、物置。納屋との位置関係は、はっきりしないが、物置につづいて納屋があると考えられる。

⑨ そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。⑩ ごんは、ばたりとたおれました。

・兵十は　主語が省かれている
・しのばせる＝忍ばせる（動）こっそり物事をする。また、隠して持つ。しのばす。「足音をーて、敵に近づく」
・出ようとする＝もくろみ動詞

・前文①②③④に引き続いて⑤⑥の動きがある緊迫した状況を読みとらせる。
　①「ようし」…決意
　②立ち上がって
　③火なわじゅうを取って
　④火薬をつめました
　⑤ちかよって

⑪ 兵十はかけよってきました。

・かけよってきました　近づき態
かけよっていきました　遠のき態
かけよりました　中立

＊この「近づき態」については、表現上、破格だという意見もある。それは、④から後がずっと兵十の立場からの文であり、さらに、次の文も、兵十からの立場から書かれている。⑪の文だけが、ごんの立場からになっているのである。しかし、読んでいて、違和感はないように感じる。ここで、わざわざ「近づき態」を選択した表現性があると読むのが素直な読みなのかもしれない。

⑥うちました。
ごんは、（くりをおいて）今、戸口から出ようとしていた。
・「足音をしのばせて近寄る」
抜き足、差し足、忍び足。動作化させる。
・ばたりとたおれる
あっけない。「ばったり」と比較させる。
・神様の仕業にされても、やっぱり、くりを持っていかずにはおれないごん、「今日も、持ってきたぞ」という満足感をもって、戸口から出ようとしたとき、ドンと撃たれてしまった。

・「かけよっていきました」がふつうだが、この文だけ、ごんの立場で書かれていることに注目させ、次の点に注意して整理させたい。
・ごんの気持ちのうつりかわり
・いたずらばかりしていたごん
・兵十のおっかあが死んだのを知ってからのごんの後悔
・「おれと同じひとりぼっちの兵十か」と、兵十に心を寄せはじめるごん
・いわしでつぐないをして、さらに後悔するごん。
・くりやまつたけを持っていってやるごん。
・お念仏がすむまで待って、兵十のかげぼうしをふみふみ、あとをつけるごん。
・かげとでもいっしょにいたい、何とかして兵十と分かり合いたい、神様の仕業と思われても、いつかはわかってもらえると信じて、また、くりを持っていかずにはおれないごん。
・今まで、一方的にごんが兵十に心を寄せていて、兵十は、全然知らないでいたのだが、初めて、兵十の方からごんにかけよっているのだ。兵十がごんを一気に理解するきっかけになるところで、兵十の魂がかけよっているともとれる。この時のごんの気持ちを考えさせる。
・ここは、くりかえして読むことが必要である。

⑫ 家の中を見ると、土間にくりが、固めて置いてあるのが目につきました。
⑬「おや」
と、兵十は、びっくりして、ごんに目を落しました。

・うちの中を
（兵十が）――――― 見ると
土間に　固めて
くりが ――― 置いてるのが
――― 目につきました。

・土間＝家の中の板敷きになっていない、地面のままの所。「農家の―は広い」
・目につく＝（慣用句）特に注意を引かれる。目だって見える。

・兵十がうちの中を見て、まず見たものは何だったの？
・土間に固めて置いてあったくり
・兵十は、「ごんぎつねめが、またいたずらをしにきたな」と思ってうちの中を見た。今度は、どんないたずらをしているか見たら、くりが目についた。
・そのくりを、兵十はどう思った？
・くりを見たとたんにわかった。
・今までのくりやまつたけは、全部、ごんがもってきてくれていたんだと悟った。

心がむかっていく対象
・ごんに　目を落としました。
ごんに目を向けました。ごんを見ました。
視線を下に落として、ごんを見たこと。

⑭「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは」

・倒置法
・か　（既出）

・「固めておいてある」　この置き方から、ごんの気持ちがわかる。
ていねいに固めているごんの姿を映像化させる。
・比較してみよう
・兵十はびっくりしてごんを見ました。
・兵十はびっくりしてごんに目を落としました。
視線を落とし、肩を落とし、気落ちしている兵十のようすが読みとれる。

・比較して考えさせる
・いつもくりをくれたのは、ごん、おまえだったのか。
・ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」
まず、確かめたいことを先に言うことにより、せき込んであわてている兵十のようす、びっくりしているようすがわかる。
・神様の仕業としか思えなかったできごとが、ていねいに置かれたくりの山を見たとたんに、ごんの仕業とわかり、その時には、もう、取り返しのつかないことをしてしまっていたのだ。
・悲痛や兵十の叫びを頭に描いて、表現読みをさせる。

⑮ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

・

・ごんは　――　うなずきました。
その時のようすや、ごんの気持ちを考えてみよう。
・ぐったりと、瀕死の状態で、目を開ける気力もない。
・でも、ごんは怒っていない。
・兵十が、初めてごんの方にかけよってきてくれ、初めて声をかけてくれた。ごんは、満足してうなずいている。
・ほんとうは、目を開けて、うんと兵十を見たいのだが、今はもう、目を開く力もないごん。

⑯　兵十は火なわじゅうを、ばたりととり落しました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。

・まだ…陳述副詞

・兵十は　――　ばたりと取り落としました。
この文から伝わってくる兵十の姿や気持ちを考えさせる。
・あらゆる気力を失い、脱力している。
・がっくりと気落ちしている。
・これほど、自分に心を寄せてくれていたごんを撃ってしまった。取り返しのつかないことをしてしまった。体中の力がぬけてしまって、放心状態に陥っている兵十。
・ごんの姿と対比させる。
・「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。」
という文について考えさせる。
・はかない感じ
・たよりない感じ

・今にも死にそうなごんの命と同じようだ。
・薄く、細く、今にも消えそうなけむりと、ごんの命。

＊「まだ」というところから、一瞬の間に、大きな展開があったことがわかる。くりやまつたけをいつも置いていってくれているのは、だれだろうと、ずっと気になっていた兵十だから、一瞬の間に理解したのだ。と同時に、ごんの命も、一瞬の間に失うことになる。

文

⑮⑯⑰は、くりかえし読み（二次読み）が必要である。